

ふくやま文学館友の会だより

第25号



2025年（令和7年）12月1日発行

〒720-0061

広島県福山市丸之内1-9-9

ふくやま文学館友の会事務局

TEL (084) 932-7010

FAX (084) 932-7020

「友の会」会長就任の挨拶を兼ねて

文学館友の会 会長 神谷和孝
此度、文学館友の会の会長に推し
ていただいた神谷（なんやかんやの
カンヤ）です。

私は12、13年前、皿海達哉氏が文
学館館長をされておられる時、文学
館運営委員会の会長をさせていただ
き、その役を退ぞいた後も友の会の
監事などをさせていただき今日まで
文学館とのつながりを保って参りま
した。友の会の会長は文学館運営委
員会の会長も兼任することゝで責
任の大きさを受けておられますが、
私が責務をまっとうするためには友
の会の皆様の御協力をいただかなけ
れば出来ないことなので、どうぞよ
ろしくお願いいたします。

友の会の前々会長の岡崎、前会長
の杉之原両氏はその任にあたって
色々の魅力的な企画をたてられ、文
学館へ一人でも多くの入館者と呼び
こもうと努力されてこられました。
私も頑張っ参りますが、ただ私は
突然に会長に推され、会長としての
抱負を全く持たないままで会長の座
に就いたものですから、自分の役割
や友の会でのどのような行事を持っ
た方がいいのかを就任以来思案中で
す。会員の方で良いプランを持ってお
られる方、また企画して欲しい行事な
ど遠慮なく申し出て下さい。今の私
の胸中には友の会を「文学を中心
にすえた楽しい会」にしたい、そのた
めには何をすべきかという思いが駆
けめぐっています。

まずは、現在、読書（文学に対し
て）、国民の関心が低下しているの
で、本の交換会とか文学に関しての

松本清張を読む

シンポジウム等を考えています。

ふくやま文学館館長 綾目広治
この四月にふくやま文学館の館長
に就任しました綾目広治（あやめひ
ろはる）と申します。前職はノート
ルダム清心女子大学教授でした。専
門は日本近代文学研究で、元号で申
しますと、主に昭和から今日の令和
の時代の文学を研究対象にしていま
す。

松本清張の名前は、ほとんど人が
知っていると思われれます。社会派ミ
ステリー作家として有名な人です。
たしかに、清張は多くのミステリー
（推理小説）を書きましたが、彼の
膨大な業績の中ではミステリーは三
分の一も無いと思われれます。彼は、
昭和史についての浩瀚な著作もあり
ますし、古代史についても多くの業
績を残し、その古代史についての学
識は専門家も認めるほどのものでし
た。その他、江戸時代を舞台にした
長編小説も書いていますし、現代の
サスペンスものの小説も書いていま
す。それは実に膨大な業績であり、
そのことは一冊が上下二段組で四〇
〇〜五〇〇頁となっている本が、全
六六冊になるといふ、彼の全集から
窺われるでしょう。しかも、その全
集には彼の全作品がすべて収録され
ているわけではなく、全集未収録の
作品も数多くあります。

その仕事ぶりの凄さについて、彼
の生前に、ある文芸評論家が（人類
史上の奇跡だ）と語ったようです。
また、驚かされるのが、彼が文学作
品を書き始めたのは四十歳を過ぎて
からで、それまでは朝日新聞の広告

部の社員として、いわゆる普通の勤
め人として暮らしていました。彼は
小学校卒業の学歴しかなく、そのた
めに屈辱的な思いをすることもあつ
たようです。しかし、その下積み生
活の体験が後の彼の文学を形成して
いったと言えます。

彼は、社会的な弱者や貧者に眼を
向ける作品を少なからず書いていっ
たのですが、それは彼の実体験と深
く関わっています。たとえば、映画
化もされ、テレビドラマ化もされ、
多くの人が少なくとも名前は知って
いる名作『砂の器』は、やはり社会
的弱者であった人物が主人公の物語
です。その社会的弱者が上の階層に
上がろうとすると、どうしても無理
をせざるを得なくなり、その無理が
犯罪を誘発するのです。『砂の器』
では最初の犯罪は大きなものではあ
りませんでしたが、それを隠蔽しよ
うとして次の大きな犯罪を犯してし
まう話です。

このような清張ミステリーでは、
犯罪を犯した人物は非難されるより
も、読者はその人物に同情してしま
うでしょう。そして、その人物が少
なくとも普通の家庭で育ったならば、
そんな犯罪を起こすことはなかった
であろう、と。むしろ、その人物に
そういう犯罪を起こさざるを得ない
ようにした社会の方が、本当の犯人
ではないだろうか、と。松本清張は
そういう物語を多く書いて、社会を
指摘しました。松本清張が社会派ミ
ステリー作家と言われる所以です。
もっとも松本清張は、最初はミス
テリー作家になる気はなかったよう
で、実際に彼の初期のものは時代小
説や短編の現代小説がほとんどでし
た。そういう多様で幅広い領域で活

躍した松本清張の文学について、友の会の文学講座でお話したいと思います。

「サヨナラ」ダケガ人生ダ

ふくやま文学館前館長 岩崎文人

〈アンパンマン〉で著名なやなせたかしとその妻暢をモデルとしたNHKの朝ドラ「あんぱん」の中で、女子師範学校の寮に入ることになった朝田のぶ（今田美桜）が御免与駅から高知に旅立つ朝、陰で見送る嵩（北村匠海）にむかつて阿部サダヲ演じる屋村草吉（ヤムおじさん）が「サヨナラ」ダケガ人生ダ」と呟くシーンがあった。

この詩句は、いうまでもなく井伏鱒二が于武陵の五言絶句「勸酒」を訳した最後の行「人生足別離／「サヨナラ」ダケガ人生ダ」からとられたものである。井伏の市井ものの代表作でもある『駅前旅館』が映画化された際、フランキー堺扮する添乗員の万年さんが映画の終わり近くで言った台詞でもある。この映画は文学館の映画会を見た。

井伏鱒二の弟子でもあった太宰治の最後の小説（未完・遺作）は『グッドバイ』であるが、太宰は「作者の言葉」で「唐詩選の五言絶句の中に、人生足別離の一句があり、私の或る先輩はこれを「サヨナラ」ダケガ人生ダ」と訳した。まことに相逢った時のよこびは、つかのまに消えるものだけれども、別離の傷心は深く、私たちは常に惜別の情の中に生きていっていると言っても過言ではあるまい」と、この小説のモチーフについて語っている。太宰の小説タイトル「グッドバイ」は井伏の詩句「サヨナラ」ダケガ人生ダ」と精妙に響きあっているといつてよい。

やなせたかしが井伏を愛読したことはよく知られているが、朝ドラ「あんぱん」ではほかに、高知連隊に入隊後福岡の小倉連隊に転属した嵩が携行したのが、井伏鱒二の『厄除け詩集』であり、この詩集が縁で上官八木（妻夫木聡）に目をかけられることになる。

さらに、高知新聞を辞め、のぶを追って再上京する際に、嵩が持つて行ったのが『厄除け詩集』であった。

そういえば、「勸酒」原文と井伏訳が刻された井伏鱒二文学碑（加茂町）が建てられた際の除幕式に配られたのが『厄除け詩集』（講談社文芸文庫）で、その本扉には文学館二階に展示してある井伏の印譜のうちのの一つ、やや大きい楕円の鱒二印が押されている。

この三月、十一年間勤務した（相談員時代を含めると二十余年）ふくやま文学館を辞した。人生の最晩年に教育界とは異なる、働きやすいまたやりがいのあるあたったかい職場で過ごすことができたことに對して、特別の感慨がある。ふくやま文学館の皆さん、またご協力とご助言をいただきました友の会の方々に心よりお礼申し上げます。

「サヨナラ」ダケガ人生ダ」あるいは「グッドバイ」といった気の利いた物言いはできませんが、深く感謝いたしますとともに、ふくやま文学館の一層のご発展を心より祈念申し上げます。長い間有り難うございました。

岩崎前館長のご退任に寄せて

深川美紀子

朗読の会「虹」は、岩崎館長に一方ならぬお世話になりました。

友の会の岡崎元会長は、友の会活性化のため岩崎館長と話し合い、館長の講演と「虹」の朗読をセットにした文学講座の開催を決めました。第一回は二〇一四年以来、六回コラボさせていただきました。

館長の講演は素晴らしく、多くの人が聴くのを楽しみにしておられました。レジュメを準備され、説明されるスタンドカラーシャツのお姿は、いつまでも私達の心に残ることでしょう。これから聴講の機会があればと願っています。

文学館は多くの年間行事を抱え、基本的には読むという作業がベースにあると思うので、行事を進めていくのはとても神経と体力を使われたと思います。館長の文学館発展を思う懸命な取り組み、訪れる方々への親切な対応は、館長

に接した人達皆さんが感じられたことでしょう。有難うございました。



心よりお礼申し上げます。
これからもお元気で益々のご活躍をお祈り申し上げます。

姫路文学館へようこそ

姫路文学館副館長・学芸員 甲斐史子

姫路文学館は、あるジャンルや作家に特化した近畿初の総合文学館として、一九九一年、姫路城をすぐ東に望む男山のふもとに開館した。世界的建築家安藤忠雄氏が初めて手がけたミュージアムでもある。一九九六年に、祖父の代まで姫路にルーツを持つ司馬遼太郎の記念室や図書室などを備えた現在の南館を増設。さらに二〇一六年の大規模なリニューアルを経て、今年で三十五年の歴史を重ねつつある。

北館の常設展示は主に、姫路城と城が建つ姫山をめぐる古今の物語や歴史の一面面をドラマ仕立ての映像や資料、グラフィックなどでたどる「姫路城歴史ものがたり回廊」と、姫路を中心とした播磨ゆかりの作家や学者たちが残した「ことば」を入口として、そのことばがどんな人物から発せられたかをタッチパネルや資料で紹介する「ことばの森展示室」の二つから成る。後者では映画監督浦山桐郎や落語家桂木朝等、エンターテインメントにおける創作者にも光を当てている。

当館が、あくまで明治以降の文学を専門としながら、展覧会では万葉集や風土記、江戸時代の紀行や俳諧、また千姫、黒田官兵衛など歴史上の人物や、歌舞伎、映画といったテーマにも果敢に取り組んできたことは、他の文学館に類を見ない。歴史博物館とは異なる視点で地域の文化や歴史に息づく〈物語〉を文化財として掘り上げる活動は、私たちの重要な務めであると考えている。

近年は、マンガなどのサブカルチャーにも注目している。今年度は、姫路出身の直木賞作家車谷長吉の大規模回顧展（春）に始まり、少女コミック誌「花とゆめ」の創刊五十周年記念展（夏）、小野不由美氏のファンタジー小説「十二国記」シリーズでおなじみの山田章博氏の原画展（12月14日まで）、そして国際日本文化研究センター協力

の企画展「戦時下の大衆文化展」(1月17日〜3月29日)と、じつに振り幅の大きなラインナップとなった。

敷地内にある大正期の和風建築「望景亭」(国登録有形文化財)についても触れておきたい。姫路文学館が建つこの場所には、かつて市内の実業家が自身の別邸として整備した13棟の建物群があった。当館建設の計画当初、老朽化が著しいことからすべて取り壊されることになっていたが、安藤氏の提言で書院造の広間と裏千家の茶室を含む区画が残されたことにより、幾何学的な安藤建築や姫路城との対比の妙が生まれるにいたった。ちなみに、望景亭は第三十八期竜王戦七番勝負第五局(11月28日、29日)の会場に選定され、話題を呼んでいる。

文学館は、物語や言葉、そしてそれらが生み出された背景を伝える生の資料を通して他者と出会い、そこに生まれる共感や違和を介して自分自身を見つめる場所である。人物や物語を丁寧に紐解くことで見えてくる人間の底知れぬ面白さと地域の文化的土壌。それらを多くの人々と分かち合うところに文学館の魅力や可能性があると言える。人々の日常や記憶を彩る存在となれるように、そして地域の文学の土壌を受け継ぎ、育み、伝えるメディアを目指して、今後も模索と挑戦を続けていきたい。

●姫路文学館

姫路市山野井町84番地



研修旅行 姫路文学館と美術館探訪に参加して

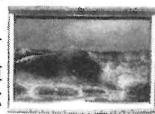
松川智明

姫路市立美術館

高田賢三展では、華やかな衣装一〇〇点の展示や愛蔵品、パリの賢三郎の模型があり、世界を舞台に活躍したデザイナーの独創的な作品に触れることができました。写真撮影OKでしたので、いくつか撮りました。

案内を務められた学芸員の方は福山市川口町から通勤されているそうです。常設展でも写真撮影

OKのものがあり、気になったギョースターヴ・クールベの「波」(一八七〇年頃)を撮りました。帰って作品を調べてみると「波」は連作で、国立西洋美術館や愛媛県美術館にも似たものがあります。描かれた当時は一八六七年パリ万博があり「ジャポニズム」が流行していたそうです。北斎の「神奈川沖浪裏」に影響を受けているのではと想像しました。



姫路文学館

建物は「城を借景に回遊し文学と対話する空間」として設計されているという事で、ここから自然と調和した雄大な姫路城を見る事ができました。ネットでもあまり見かけない景色です。



車谷長吉展、帰ってお名前を拝見しますと「ちようきち」ではなく「くるまたにちようきつ」だったのですね。妻の高橋順子さんが書かれた「夫・車谷長吉」を読んでみたくなりました。

斑鳩寺(推古天皇が聖徳太子に寄進した土地に建てたお寺)重要文化財仏像の前で住職のお話がありました。「鎌倉の大仏はどのような手の組み方をされていますか? オツケーのような形。これは阿弥陀様を表しています。お釈迦様は手のひらを上に重ねて組まれています。組み方によって阿弥陀様かお釈迦様かわかるわけですね。仏師が阿弥陀様を彫っていて指がとれた事から『おしゃかになる』。仏教からきた言葉は他にも『旦那』があり施しをする人を意味しますが、今は仕事から帰って料理や洗濯をして初めて旦那ですからね。」

聖徳殿の前に高松宮殿下お手植えの三葉松がありました。夫婦和楽・家内安全を象徴していて、この松葉は黄金色になって落葉するため身に着けると金運がよくなると言われています。帰ってから知りました。昼食はご一緒の方々と浜省や藤井風、ふくやま美術館のバラ展などいろいろなお話ができてよかったです。また、岡崎先生が元気に過ごされているとお聞きし、安心しました。私は文学や美術、歴史については疎いのですが、わからなくても優しい旅でした。そして多くの事を学ぶことができました。ありがとうございます。

被爆八十年によせて

杉之原壽美子

二〇二四年十二月、日本の被団協にノルウェーのノーベル平和賞が授与された。受賞理由は、被爆者として知られ、広島、長崎の被爆者らの核廃絶への努力、また核兵器を再び使用させないための証言活動や草の根運動による、核廃絶への努力に対してだ。

原爆につひえし街のレプリカに

被爆死したる叔母の幻

爆心地近くに住みぬし叔母なれば

避けがたかりき熱線の惨

黙祷の電車の中になほ聞こゆ

原爆記念日に撞く鐘の音



原爆を許すまじ

土屋純子

今年は広島、長崎が被爆して八十年になる。毎年八月六日は、小学校の夏休み最初の登校日だった。午前八時十五分、全生徒は被爆死した人達のために祈りを捧げる。そして「原爆を許すまじ」の歌を合唱する。私の卒業した広島市立観音小学校は、校庭が広く原爆死した人達を葬った場所だと、聞かされていた。プールのほとり、堀の上、夜になると燐が燃えていた。けれども私達はバラック建ての校舎で学び、焼けただれたガラスの欠片を持って遊んだ。皆、懸命に生きてきた。同級生の恵さんは、原爆で父母を亡くして、お兄さんと暮らしていた。そして毎月比治山のABC(原爆障害調査委員会)から迎えに来る車に乗り、血液検査を受けていた。帰って来ると、検査後に貰う板チョコを私達にわけくれた。恵子さんは、頭がよくて、美人。けれども時々、病気で学校を休むことが多く、見舞いに行くと、いつも飴の包み紙で折り鶴をたくさん折っていた。私達も一緒に折り、千羽鶴として部屋に飾った。過ちは繰り返してはならない。しかし、ロシアのウクライナ侵攻からはや四年近くになる。現在

は、世界の人々が核の恐怖に脅かされている。北朝鮮、中国、イランも怖い存在だ。オバマ氏も、バイデン氏も、アメリカの元大統領は、核のボタンを広島に持ち込んで来た。いつになれば、平和と言える日が来るのだろうか。核の廃絶はあるのだろうか。核兵器禁止条約は、守られているのだろうか。平和な世界でありたい。



俳句

文学館へ桜吹雪の中を行く
青葉時雨若き太子の孝養像

奥山 清美

水底の光も掬ふ紙漉女
戦争の正義はあらず夏の星

塚本 みや子

梅雨明けて猛暑となりて時を編む
空蟬の姿残してあちこちに

松尾里子(竜胆)



短歌

文学館自転車置き場奥がわの
隅に灯りかドクダミの白
ブロックの塀の回りに十葉が
地下茎延ばし白い花咲く

小田 淑子

城見ゆる姫路文学館を訪ね来て
文豪のことばの森を歩みぬ

土屋 純子

文学の館の水のアプローチ
心洗はるさやか水の音

日石 輝子

「二カ月前から同居しています」あつけらかんと
今日入籍の二人来ている
福山城は切り株だらけ木の間より
見ゆるがよしと友と言いいり



悲鳴あげ片手一杯の薬飲み
猛暑の中で生きながらえて
対岸の大久野に母働き
今は亡きて兎の島に

松尾里子(竜胆)



詩

瀬戸際

安達 道子(二瀉千里)

百合が ひっこ抜かれて
しおれかかっていた
(目にしたからには見逃さない)
拾って 根っこ部分をきる
花瓶に生ければ
百合は みごとに済生した
夕方 ガラス越しに
外が鮮やかなオレンジ色に染まる
暑い! 外は四十度だった真昼
百合も つらい
あげは蝶は 軽やかに飛ぶ



友の会活動内容(文学館行事一部含む)

一、友の会だより(第二十五号) 発行

二、総会・講演会

日時 四月十九日(土)
演題 「江戸出版人・葛屋重三郎―「葛屋」
(谷津矢車作)を読む」

講師 岩崎文人(ふくやま文学館前館長)
三、第二十三回友の会文学探訪研修旅行

日時 六月八日(日)
内容 姫路市立美術館、「高田賢三展」・清
交倶楽部昼食・姫路文学館「没後十年
作家車谷長吉展」、望景亭・斑鳩寺見学

四、井伏鱒二没後三十二年鱒二忌(文学館と共催)

日時 七月十三日(日)
演題 「井伏鱒二が、好きだーっ!!」
講師 坂上友紀(本は人生のおやつです!!)店主

朗読 「虹」 井伏鱒二著「遙拝隊長」を読む
講演会(文学館主催)

日時 九月七日(日)
演題 「黒い雨」を書く井伏鱒二―「かきつば
た」から「黒い雨」へ―

講師 前田貞昭(兵庫教育大学名誉教授)
第十回「文学講演会」(友の会主催)

日時 十一月九日(日)
演題 川端康成「伊豆の踊子」「雪国」
―名作の不可解箇所を読む―

講師 綾目広治(ふくやま文学館館長)
ロビーコンサート(友の会主催)

日時 十一月十五日(土)
出演 シャンソン(岡崎雅亮と、のほほん
ファミリーコンサート)

第十回「文学講座」(友の会主催)
日時 一月二十四日(土)

演題 「星の尋ね旅人」
講師 神谷和孝(ふくやま文学館友の会会長)
朗読 「虹」による

特別企画展(文学館主催)
「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂へようこそ 番外編
たたりめ堂へようこそ」

会期 四月二十五日(金)～六月二十八日(土)
「被爆八十年 井伏鱒二「黒い雨」」
会期 八月一日(金)～十月五日(日)

「光原百合の世界」
会期 十月二十四日(金)～十二月二十七日(土)
二〇二五年度文学講座(文学館主催)
一月から三月までに三回の予定です。

編集を終えて

編集委員 澤田・土屋・永久・村上
今年は「戦後八十年」。さまざまな取り組みが
ありました。ふくやま文学館でも館長が交代され、
友の会会長も代わる節目の年となりました。
皆様から多くの原稿をお寄せいただき、内容豊
かな「友の会だより」をお届けできることを感謝
いたします。今後ともご協力をよろしく願いい
たします。